

## 登山の基本（登山のHow To） 緊急時対応（番外）

# 危険な夜

広島県山岳連盟 事務局長 松島 宏

人間、「楽な方向に走ると、ろくなことがない」を実感した危険な夜のことを紹介する。2007年秋、中国四川省チョンライ山系の未踏峰霸王山（5551m）に初登頂した夜の出来事である。霸王山は槍のように尖った山で、地元では神の山として崇拝されている。

頂上アタックは3名の隊員で4700mの最終キャンプから実施した。頂上まで標高差800mであるが垂直に近い岩壁が聳え立っている。軽量化したテントや食料、登攀用のギアとフル装備で出発した。軽量化したとはいえ、一人平均12～13kgの荷物である。朝暗いうちからスタートして昼を過ぎたが、ルートは険しく遅々として進まない。

壁が急激に立ち始めてトップを私からY氏に交代。斜度は70度から場所によっては垂直となる。重たい荷物を担いでハーケンを回収しながらの岩登りは本当にしんどい。スピードが上がらず、時間だけが無情にも過ぎていく。誰かの提案で重たいキャンプ用装備や食料は途中に置き、軽くして登りスピードを上げようということになった。この調子なら登頂後下りてきてキャンプできる。そんな甘い考えはやはり神の怒りに触れた。そして、きつい試練を呼んだ。

Y氏の担当した5ピッチは時間がかかり垂直部分から頂上に続く稜線に出た時点で19時。日没となった。赤い夕焼けがきれいだった。19時半、真っ暗な中、岩稜はやがて雪稜となり隊長のリードで頂上に達した。初登頂は生

まれて初めて。嬉しかった。感動した。BC（ベースキャンプ）との交信、写真撮影と儀式を済ませ下山にかかる。

緩い岩稜から垂壁になり、懸垂下降\*に移る場所で隊長にビバークを進言した。暗い中、支点作りも困難だし、落石も怖い。ルートもよく見えない。98年の天山遠征で7000mの瀕死のビバークを経験しているから私は臆病だ。キャンプ用品をデポする時、シュラフカバーと防寒用品をザックに忍ばせておいた。私はハング下の雪の上に石を置きシュラフカバーに入りハーケンを打ち自己確保した。

辛く長い夜が始まった。二人は岩尾根のくぼみに入り込んだようで姿は見えない。二人に若干の装備を渡して夜を迎える。自分には一枚のシェルターがあるので朝まで生き延びる自信はあった。しかし二人は着の身着のままなのでマイナス10度で風はかなり吹く状況は凍死の危険性が高い。一晩中一睡もできず震えていた。最初は行動食を食い続けた。時々雪を掴んで口に運んだ。砂が口の中で音をあげた。

どうやってもどこを抱えてもさすっても寒いので諦め、妄想を始めた。縁起でもないが、朝一人が冷たくなっていたら、二人が冷たくなっていたらと、対策を真剣に考えていた。朝二人が生きていたので事なきを得たが、昨日カラスが我々の頭上をしつこく巡回していた理由がそのときわかった。彼らはあの稜線上で我々がのたれ死ぬことを確信し物色して



頂上直下の登攀



もう動きたくない！ 睡魔が襲う！

いたらしい。最悪の想定として、二人が凍死したら私一人では下ろせないで裸にして鳥葬！そしていつか骨を拾いにと考えていた。真剣だったから笑える。

朝になり、姿の見えなかった二人の所へ行くと動いていた。よかった。スークーニャン峰が美しく輝いていた。7時位から懸垂下降を始める。Y氏は視力が低下、私が支点を作り先頭で下る。ロープが当たり落石も多かったが致命的なダメージはない。岩が凍っていて滑るので危ない。キャンプ用品をデポした場所まで下り、コンロで雪を溶かし、湯を沸かし水分補給。脱水状態でフラフラであったので貪るように飲む。

午後3時前、無事AC（アタックキャンプ）に帰着。脱水を解消するために水分を補給し続ける。いくら飲んでも乾きは癒えない。その夜あれだけ水分を取ったのに尿が一切でなかった。どれだけ身体の細胞の水分が枯渇していたか理解できた。

初登頂はできたが、「荷物を軽くして……」のツケは結構命がけの危険な夜となった。

人間、何度危ない目に遭っても、ついつい楽な方向に流れてしまう。

\*懸垂下降：岩にハーケンなどを打ち込み支点にし、ロープを使って下降すること

(まつしま ひろし)



置いてきた装備に辿り着き久々の給水、生き返る！



右端のスカイラインを登った！